

(2022年12月掲載)

研究成果を発信する(1) ～本を書くことの魅力～

これから4回にわたって本コラムを担当する京免徹雄と申します。専門は教育学で、筑波大学では「特別活動学」研究室を担当しています。主な研究テーマは、教科外活動・キャリア教育・生徒指導の国際比較や、シティズンシップ教育としてのキャリア教育、特別活動(日本型キャリア教育モデル)の国際化、などです。

ご参考:<https://researchmap.jp/kyomen>

私の担当回では、「研究成果を発信する」をテーマに、特に学術書を刊行についてお話をしたいと思います。私自身、これまでに学術助成金を得て、以下2冊の単著を刊行しました。

- ・京免徹雄(2015)『フランスの学校教育におけるキャリア教育の成立と展開』風間書房。
- ・京免徹雄(2021)『現代キャリア教育システムの日仏比較研究－学校・教師の役割とそれを支えるメカニズム－』風間書房。

近いうちに、あるいは将来的に、これまでの研究を図書にまとめて発信したいと考えている人にとって、その時の経験が少しでもお役に立てばと考えています。

さて、「研究成果の発信」といって真っ先に思い浮かぶのは、学会発表や論文投稿ですが、本(特に単著)を刊行することの魅力はどこにあるのでしょうか？

第1に、価格等との関係で上限があるとはいえ、圧倒的に文字数が多いことです。それゆえ、論文や発表の題目になるような、焦点化された小さな研究テーマだけでなく、それらのもとにある、あるいはそれらを繋ぎ合わせることで見えてくる、大きな研究テーマについて論じ、幅広く発信できることです。

第2に、論文等では書かない(あるいは書けない)ようなこと、具体的には自分自身の研究動機や、学術的知見をふまえた提言や新たな政策、制度、実践の構想なども盛り込めることです。査読紙で著者の意見を書いたならば、多くの場合は削除せよという修正コメントがつくこととなりますが、図書ではそのような縛りはなく、自由に言いたいことを主張できます。

一方で、それは責任が伴うことを意味します。少し話がズレますが、私は査読というのはいやっかいなものではなく(とはいっても不採択になってイラっとすることもあります)、自分の研究の学術的価値を証明し、高めてくれる有難いものだと考えています。逆にいえば、第三者のチェックなしに本を出すときには、不安もあります。

第3に、読者との交流から、次の研究に向けたエネルギーやヒントを獲得できることです。お金を出して本を買ってくれる読者は、自分の研究の良き理解者であり、よきアドバイザーです。実際、無駄な部分を全てそぎ落とされた論文を読むのと、著者のスタンスや人間性さえも

(2022年12月掲載)

描かれた図書を読むのとでは、理解の深さがかなり違うと感じています。そのような相互交流の場の1つが学術雑誌やニュースレターに掲載される「書評」や「図書紹介」です。

第4に、研究者あるいは実践者としての自分のキャリアの棚卸につながることです。啓発書はともかくとして、単著の学術書を全て書下ろしで書く、ということはまずありません。これまでの論文や実践報告などをまとめて、整理していくことになりますが、その過程で必然的に過去の研究等を振り返り、未来を展望することになります。そういった点では、図書の出版は1つの区切りでもあり、長い研究生活に節目をつける機会ともいえます。

第5に、学術書を出版することが、特に人文・社会科学系では研究業績としてそれなりに評価される、ということもあえて書いておきたいと思います。場合によっては、学会賞などを受賞できることもあるでしょう。業績主義の時代にあって、戦略的・打算的に本を書くことも、決して否定されるべきではないと考えています。

本を書くというのはそれなりの労力を伴うことですが、このようにたくさんの魅力があります。特に論文は結構書いてきたけど、本はまだ…という方がいらっしゃるかもしれません、ぜひチャレンジしてみてください。

では、どうやって??? それこそが、このコラムのテーマです。次回から、本の構想を練る、助成金を獲得する、書評を活用する、といった順序でお話していきたいと思います。

(筑波大学人間系 京免 徹雄)